

東洋思想で昏迷の時代を生き抜く

主体性ある社会の構築＝窮すれば変ず 変ずれば通ず＝

はじめに

この講話は、東洋思想（儒学・道教・仏教など）を素材として、これから皆様の社会生活での「生き方」の一助になればと思い進めさせて頂きます。

また、この講話は、平成9年のある講演会で話を致しましたものを改訂したものであります。

失われた30年といわれますが、この講話を最初にした当時と現在とを比べましても、我が国の社会的進化、進展が、政府の政策や特に財政などで、ほとんど見受けられないことに驚きを感じます。

このサブタイトルにあります「窮すれば変ず、変ずれば通ず」という対策が為されていないということでもあるように思われます。

西郷南洲「偶感」

幾たびか辛酸を歴て 志始めて堅し
丈夫は玉碎するも 甄全を恥ず
一家遺事 人知るや否や
児孫の為に 美田を買わず

人間には陰陽、善悪などが同時に存在しますので、人間は誰でも様々な問題をかかえながら生きていると思います。

つまり、人生は、常に塀の上を歩いているようなものであり、塀から落ちないようにバランスを取りながら歩んでいるとも言えましょうか。

孔子の言葉（論語・泰伯篇より）

戦々競々として
深淵に臨むが如く 薄氷を履むが如し

孔子は危険な状況に直面した時の心構えとして、上記のようなことを述べております。深い淵に立っては、そこから落ちないように、薄い氷の上を歩くときには、その氷を踏み壊して水中に落ちないように、慎重に行動しなければならないということです。

危険な状況に際したときは、私利を優先させる行動ではなく、その時や場、状況に合わせて、公利を優先させる行動をすることが重要であるということです。

中庸・第一章

喜怒哀樂の未だ発せざる 其れを中と謂う
発して皆節に中たる 其れを和と謂う

喜怒哀樂などの感情がまだ表面に出ていない状態、それを中と言います。それが表面に出ていても節度に合った対応をしている状態、それを和と言いますというよう
な大意になります。

つまり、様々な事象に対応するためには「中和の心」が大切であるということです。
す。「中和の心」とは、「何事にもとらわれない心」ということでもあります。

萬化身から生ず

この言葉は私が師事いたしておりました九州大学名誉教授の岡田武彦先生（儒学者）の言葉ですが、自分の周りで起こる様々な事象は、誰か他の人間が起こしているものではなく、すべてが自らが起こしているものであるという意味であります。

企業経営者であれば、自らが創業したときの原点に立ち返り、現在やっていることは、本当に志を以てやりたいと思っていたことなのか、間違った判断をしていないかなどを省察して、自らの意念を活性化させていくことが必要になります。

過ぎたるは猶お及ばざるが如し (孔子の言葉)

弟子の子貢が孔子に「弟子の子張と子夏はどちらが学問が進んでおり、優秀ででしょうか。」という質問をします。それに答えて孔子は「子張は進みすぎている、子夏はちょっと足りない。」と答えます。それを聞いて子貢は「それならば、子張の方が優秀なのですね。」と言うと、孔子は「進みすぎているのと、ちょっと足りないのは同じである。」と答えます。

これは弟子の内面までも見通した言葉だと思います。そして、それぞれに合ったマンツーマン（ワンオンワン）の教育をしていくことになります。

孔子の人間観

論語の中に人間の見方として孔子は次のようなことを述べております。

その人の日頃の振る舞い、その人の経歴、その人の落ち着くところを観れば、その人がわかる。

人を指導するためには、それぞれの人の人格、人間性を見抜くということが大切になります。

朱子の思想と王陽明の思想

朱子の場合は、善悪を明確にし、心の本性である善念を発揮させるためには、悪念を徹底的に除去していかねばならないという観点から思想を展開しているのに対して、王陽明の場合は、心の本性である善念を発揮させるためには、元来人間の心の本性は善念であるので、その善念を発揮させ、周りにある悪念を徐々に取り除けば、その分、善念が蘇り、増えていき、最後には善念そのものになるという観点から思想を展開しております。

これは、王陽明が唱える人間は誰でも「良知」をもっているという思想にも繋がります。また、これは、大乘仏教でいう「一切衆生悉く仏性有り」、人間は誰でも仏性を持っているということでも有りましょう。

良知とは（孟子尽心篇上より）

孟子曰く、人の学ばずして能くする所の者は、其の良能なり。
慮らずして知る所の者は、其の良知なり。

（大意）

孟子が言った「およそ人には特に学ばなくても自然によくできる能力、つまり、良能がある。良能も良知も生まれながらに持っているものである。」

人間はだれでも「慮らずして知る所の者」つまり、「良知」を持っているということです。仏教で言えば「仏性」。

易経についての概要

易経とは天地自然と人間との関わりをもとに著されたものであります。

それはまず、太極に始まり、陰陽二気が生じ、それが分裂して四象になり、八卦になる、そして、その八卦をマトリックスさせて、六十四卦になり、それを基調として人生を問うということになります。元を正せば、世の中の動向は、全ては太極から始まるということになります。

この一元論的発想は東洋思想の原点にもなり得ます。陰陽、善悪、賢愚、男女など全ては一つのものであり、太極が意識に作用されて、始動して形になって表に出てくるということです。

抜本塞源論の「万物一体の社会」とは

それぞれの人たちが、それぞれの人たちに与えられた役割を果たし、ある人が悲しむと他の人も自分のことのように悲しみ、ある人が喜ぶとまるで自分のことのように喜ぶ、そして、一つの大切な目標に向かっては一丸となって協力し合っていく。

つまり、力のない者同志だから助け合っていこうという発想ではなく、一つの社会的役割を果たしている、または、自分の役割がわかり、それに邁進していこうとしている人々が集まり、社会的使命観の中で一丸となって行動していこうという姿であるように思われます。これは、所謂、日本型経営といわれたものを彷彿させるようにも思われます。

孔子の「人と与（とも）に生きる」とは

孔子は人間にとって「人と与に生きる」ということが、最も重要なことであると述べております。そして、王陽明が述べているように「人と与に生きる」ためには、自分自身も力をつけていかねばなりません。「与に（ともに）」という言葉は、「与える」と言う意味でもあります。

つまり、自分の持てるものを世の中のために「ギブ」する、与え合う、つまり「キブアンドギブ」の精神（仏教で言う布施、利他の精神）なしでは人間社会の進化も進展もないということであります。